

なつ

せいざかいせつ

夏の星座解説



M13・球状星団

長いお休みのある夏は、自然に恵まれた場所で過ごすチャンスも多い季節です。
そんな夏の夜、ちょっと足を止めて見上げてみれば、そこには満天の星空が…。
華やかな夏の星座たちが、にぎやかに出迎えてくれます。

なつ 夏の星座解説

(約16分)

夏の夜空を二分するような、ぼうっとした光の帯、これが天の川。夏は天の川が一番見やすい季節です。この天の川にそって、夏の星座を見ていきましょう。

さそり座 ~アンタレス~

南の空低いところ、天の川の一番濃く見えるあたりにある、燃えるような色の明るい星が、一等星のアンタレス。「アンチ・アレス」つまり「火星に対抗するもの」という意味の星。日本でも昔から赤い色がまるでお酒に酔った顔のようだ、ということから「酒酔い星」と呼ばれていました。このアンタレスを中心に、アルファベットのSの字の形に星を結ぶと出来るのが、さそり座です。ギリシャ神話では、乱暴者のオリオンを懲らしめるために神様が放ったサソリということです。



いて座 ~南斗六星~

天の川をはさんで、さそり座と反対側にある、小さなスプーンのような星の並びは、「南斗六星」。南のひしゃくの六つの星、という意味で、いて座の目印です。

弓をつがえて、サソリをねらっています。いて座のように、上半身が人で下半身が馬の種族を「ケンタウルス」といいます。たいていのケンタウルスは、乱暴者ですが、いて座のケイローンだけは賢くて、音楽や医術、武術に優れた人でした。



へびつかい座

そんな彼のもとからは、たくさんのギリシャの英雄たちが巣立って行きました。中でも一番弟子といわれたのが、ギリシャの名医となったへびつかい座のアスクレピオス。今でもケイローン先生を慕ってすぐそばに控えています。さそり座のすぐ下あたりの、おにぎりのような形の星の並びが、へびつかい座です。



ヘルクレス座 ~球状星団・M13~

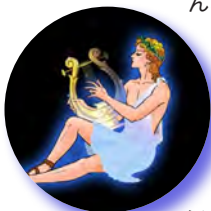
へびつかい座にとらめっこしているのが、ヘルクレス座。ギリシャの英雄ですが、星座としてはあまり目立ちません。でも、自慢の天体を持っています。腰のあたりにある、M13。

このつぶつぶの一つ一つが、太陽と同じような恒星で、その数は100万個以上。このような天体を「球状星団」といいます。



こと座 ~織り姫星、ベガ~

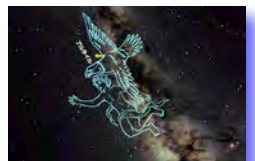
天の川をずうっと上で輝く二つの星があります。明るい方が「織り姫星」、1年に1度、出会うことが出来る二つの星ですが、なんとか巡り合わせてあげようと、たらいに織り姫星は、こと座の一等星「ベガ」。その奏でる音色は素晴らしく、森の



の方へたどっていくと、天の川の両岸で向かい合っちょっと控えめに輝く星が「彦星」。七夕伝説では、実際に星が動く訳ではありません。でも、昔の人はな張った水に星を映して揺らしてみたりしたそうです。ギリシャ神話では、オルフェウスが持っていた豎琴で、動物たちや水辺の草でさえも聞き惚れたそうです。

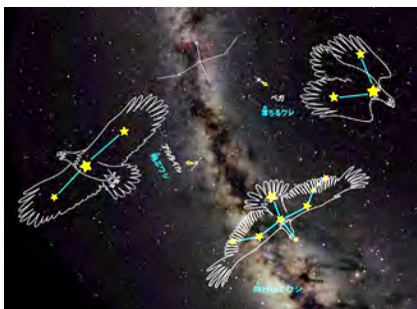
わし座 ~彦星、アルタイル~

一方、彦星は、わし座の「アルタイル」。神々の王ゼウスが、羊飼いの少年ガニメデスをさらうため、変身した鷲の姿が星座になりました。ゼウスは、この美しい少年がことのほかお気に入りだったらしく、秋の星座、みずがめ座としても天に飾られています。



はくちょう座 ~3羽の鷲が舞う~

こと座とわし座の間、天の川の中に大きな十字の形に星が並んでいるのが、はくちょう座。わし座と同じように、神々の王ゼウスが変身した姿の星座です。古代アラビアでは、この星座の並びを「飛びゆく鷲」と呼んでいました。そしてさらに、ベガとアルタイルの回りにも鳥の姿を描き出したのです。「ベガ」は「落ちる鷲」という意味で、ベガと暗めの星二つが作る小さなVの字を、羽を畳んだ鷲に見立てました。「アルタイル」は「飛ぶ鷲」という意味。彦星の連れた牛に見立てた二つの星が、鷲の広げた翼になりました。夏の夜空には、3羽の鷲が舞う、というわけですね。それぞれの一等星を結んでできるのが、「夏の大三角」です。



天の川散歩と流れ星 ~流星群~

天の川散歩を楽しんでいると、短い夏の夜は、あっという間に更けてゆきます。

西に傾いた夏の星座を見上げると、そこには流れ星が…。空の決まった方向を中心に、二つ三つと流れてゆくとしたら、それは「流星群」です。まだまだ足もと暗い帰り道。空の花火大会「流星群」に見とれてつまずいたりしないよう、気をつけて下さいね。



語り: 畠山里美 脚本: 高島規子 CG: NOBO 星座・神話イラスト: 塚田洋子 編集: 福留政彦 天体写真: N.A.Sharp, REU program/NOAO/AURA/NSF